

優しさの奥行き (2)

—ヨハネによる福音書 21 章 15～17 節—

矢野 眞実

今回は「あなたに何の関係があるか」(ヨハネ 21:22) との 厳しくきつい物言いにも響くペトロに対するイエスの言葉から、真実深くあるところの「恵み」について御一緒に考えました。そして、それは実に「優しさの奥行き」というものを秘めた言葉でもあることを見ました。今回はそこから逆引き的に節を戻り、直前の箇所である「ヨハネ 21:15～17」をテキストにして「優しさの奥行き」についていま一度、想いを巡らせてみたいと思います。

それにしても、今回の箇所くらい、読む人の読み取りや理解の仕方が様々なところもそうないのではないのでしょうか。とりわけ、イエスとペトロの間で交わされる「(わたしを) 愛しているか」「(あなたを) 愛しています」云々とのやり取りをめぐっては、その解釈の仕方が文字どおり色とりどりです。その中心的な理由は、「愛する」と(合計6回。繰り返しまで入れると7回) 訳されている言葉が原語のギリシア語ではすべて同一の一語ではなく、2つの語が入り混ざって用いられているためです。そもそも、この箇所には、これ以外にも(「ご存知です/よく知っておられます」「小羊/羊」「飼いなさい/世話をしなさい」と) 同じような類語の混在が見られます(下記【参考】「1 Brown」「2 Beasley-Murray」「3 Wright」を御参照ください)。少しばかり面倒な箇所のようなので、それはそれとして、「愛する」という部分の表現がどうなっているか、まずは日本語の聖書を見比べてみましょう。

新共同訳

イエス：(わたしを) 愛しているか。

ペトロ：(わたしがあなたを) 愛していることは・・・

イエス：(わたしを) 愛しているか。

ペトロ：(わたしがあなたを) 愛していることは・・・

イエス：(わたしを) 愛しているか。

ペトロ：(わたしがあなたを) 愛していることを・・・

口語訳

イエス：(わたしを) 愛するか。

ペテロ：(わたしがあなたを) 愛することは・・・

イエス：(わたしを) 愛するか。

ペテロ：(わたしがあなたを) 愛することは・・・

イエス：(わたしを) 愛するか。

ペテロ：(わたしがあなたを) 愛していることは・・・

文語訳

イエス：(我を) 愛するか。

ペテロ：(わが汝を) 愛する事は・・・

イエス：(我を) 愛するか。

ペテロ：(わが汝を) 愛する事は・・・

イエス：(我を) 愛するか。

ペテロ：(わが汝を) 愛する事は・・・

新改訳

イエス：(わたしを) 愛しますか。

ペテロ：(私があなただを) 愛することは・・・

イエス：(わたしを) 愛しますか。

ペテロ：(私があなただを) 愛することは・・・

イエス：(わたしを) 愛しますか。

ペテロ：(私があなただを) 愛することを・・・

岩波訳

イエス：(私を) 愛しているか。

ペテロ：(私があなたに) ほれこんでいること・・・

イエス：(私を) 愛しているか。

ペテロ：(私があなたに) ほれこんでいること・・・

イエス：(私に) ほれこんでいるのか。

ペテロ：(私があなたに) ほれこんでいること・・・

(新共同訳→) 新翻訳事業パイロット版

イエス：(わたしを) 愛しているか。

ペテロ：(わたしがあなたを) いとおしんでいることは・・・

イエス：(わたしを) 愛しているか。

ペテロ：(わたしがあなたを) いとおしんでいることは・・・

イエス：(わたしが) いとおいしいか。

ペテロ：(わたしがあなたを) いとおしんでいることを・・・

御覧になってすぐにもお気づきのように、訳出が基本的に 2 つのタイプに分かれていることが見て取れます。(イエスとペテロの) 両者の全体に一貫して同じ訳語「愛する」を当てている聖書(新共同訳、口語訳、文語訳、新改訳)と、それを適宜、「愛する」と「ほれこむ」「いとおしむ」というふうに訳し分けている聖書(岩波訳、新翻訳事業パイロット版)の 2 つです。なぜそうした違いが出てくるかという、冒頭でも触れたように、そこで使われている元々のギリシア語が単一の一語で

なく、2種類の語が混在しているからです。そして、それが単に訳語の選定にとどまらず、本文の解釈とそこに置かれたメッセージの理解にまで影響を及ぼすことになります（より正確には、本文の解釈に影響を与え、そこから訳語の選択を方向づける、と言うべきでしょうか）。そのようにして（これも初めに申し上げたように）読む人の読み取りや理解の仕方に種々の相違を生じさせるのですが、今回もまた、それが（引っ掛かりが大きい分、やはりその分だけ）けっこう重要な結果に結びつくわけで、丁寧な考察が求められる箇所と言えます。

ということで、まずもって原文のギリシア語に当たり、続いて、そこから生まれた代表的な理解の仕方を整理してみたいと思います。上記の イエスとペトロの間の3度のやり取りは、ギリシア語では次のようになっています。③の（ ）内は、新共同訳で「三度も、『わたしを愛しているか』と言われたので、悲しくなった」と訳されている部分です。

<u>イエス</u>	<u>ペトロ</u>
① ^{アガバース} $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\tilde{\alpha}\varsigma$ ^メ $\mu\epsilon$; (15 節)	①' ^{フィロー} $\phi\iota\lambda\tilde{\omega}$ ^セ $\sigma\epsilon$
② $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\tilde{\alpha}\varsigma$ $\mu\epsilon$; (16 節)	②' $\phi\iota\lambda\tilde{\omega}$ $\sigma\epsilon$
③ ^{フィレイス} $\phi\iota\lambda\epsilon\tilde{\iota}\varsigma$ ^メ $\mu\epsilon$; (17 節) (^ト $\tau\acute{o}$ ^{トゥリト} $\tau\acute{\rho}\iota\tau\omicron\nu$ = $\phi\iota\lambda\epsilon\tilde{\iota}\varsigma$ $\mu\epsilon$;	^{エリウーペーセー} $\acute{\epsilon}\lambda\upsilon\pi\eta\theta\eta$) ③' $\phi\iota\lambda\tilde{\omega}$ $\sigma\epsilon$

初めに、ここで用いられている問題の語（動詞）の説明から始めましょう。似たような2種類の語が使われていると言いましたが、それらは " $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\tilde{\alpha}\varsigma$ " と " $\phi\iota\lambda\tilde{\omega}$ / $\phi\iota\lambda\epsilon\tilde{\iota}\varsigma$ " の2つです。それぞれ、" $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\tilde{\alpha}\varsigma$ " は "^{アガバオー} $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\acute{\alpha}\omega$ " の変化形（直説法、能動相、現在、単数、2人称）で、" $\phi\iota\lambda\tilde{\omega}$ / $\phi\iota\lambda\epsilon\tilde{\iota}\varsigma$ " は "^{フィレオー} $\phi\iota\lambda\acute{\epsilon}\omega$ " の変化形（直説法、能動相、現在、単数、1人称/直説法、能動相、現在、単数、2人称）で用いられています。そして、（一般論として）" $\acute{\alpha}\gamma\alpha\pi\acute{\alpha}\omega$ " がいわば「神的な、高次の愛」を意味するのに対し、" $\phi\iota\lambda\acute{\epsilon}\omega$ " は「人間的な、それより幾分低い愛」を表わすと言われることが少なくありません。そうしたところから、翻訳の仕方に違いが出てくるわけです。すなわち、（文体や文脈等の特徴から）両者の相違に重きを置く訳者はそれぞれに異なる訳語を当て、（これまた、その文体や文脈等の特徴から）それをさほど重要と考えない訳者はどちらにも同じ訳語を当てることになります（ただし、意味的違いからというより、異なる原語に単純に直訳的に異なる訳語を当てるといった場合もあります）。こうして、（例えば 邦訳聖書では）新共同訳・口語訳・文語訳・新改訳がそろって「愛する」という一語をすべてに当てる一方、岩波訳や（新共同訳の）新翻訳事業パイロット版は " $\phi\iota\lambda\acute{\epsilon}\omega$ " の部分に別の訳語（「ほれこむ」「いとおしむ」）を当てるといった状況が生じています。それにしても、岩波訳の「ほれこんでいる」というのは なんともおもしろい訳ではない

でしょうか。ちなみに、森野（善右衛門）先生はこれを「好き」というふうに表示していますが、この種の訳語としては一番ピッタリするかもしれません（下記【参考】「4 森野」を御参照）。もちろん、（前回も申し上げましたが）イエスもペトロも元々はギリシア語でなくアラム語で言葉を交わしたのしょうから、現在の聖書に見る形での表現はヨハネ福音書の編集者らが伝承を介して受け取り理解したものと言えるでしょう。けれども、少なくともそうした歴史に関わった者たちは今回のイエスとペトロの言葉を、現在のような形でギリシア語に置き換えたということ。そのことだけは間違いないわけで、彼（ら）がその際、どのような意図をもってそのようにしたのか（あるいは、そこにさほどの意図はなかったのか）が問題となります。

そこで、以上を受けての、今回の箇所をめぐる様々な読み取り方を次に御紹介したいと思います。事を分かりやすくするため、各種の理解を幾つかのパターンに分類整理して記すことにしましょう。

A. 2つの語の使用にさしたる意味を認めない立場

ヨハネ福音書の特色（類語を同義的に多用）、ヘブライ語・アラム語の用法（両語共そもそも、基本的に一つの動詞で多様な愛を表現）、ペトロの応答の様子（問いと答えの言葉の違いを意識していない様子）等から、2つの語が混在して用いられていても、そこにさほどの意味はないと考える立場です（下記【参考】「1 Brown」「2 Beasley-Murray」「3 Wright」。「5 大宮」「6 シュルツ」も基本的に同様とみられる）。

また、これに近いものとして、両語にそれぞれ別の訳語を当てはするものの、そこに有意な意味の違いがあるとは考えない学者もいます。森野先生がその一例で、それぞれに「愛する」「好き」と異なる訳語を当てる一方、しかし両者は全く別のことではないと言われます。イエスの三度目の問いは、表現と語調を変え、「あなたはわたしが好きなのか」と念を押して、ペトロの心に食い込むように言われたものだということです。（下記【参考】「4 森野」）松永（希久夫）先生も同様に、表現の差異は言葉の「遊び」とでも言うべき技巧的なもので、意味的なそれはないと言われます（下記【参考】「7 松永」）。

ならば、内容的な読み取りについてはどうかというと、（立場が同じなのだから、その内容理解も一致していると思いきや）ここで再び、種々の相違が現われてきます。（この立場からして）もちろん、「さらに3回目も」「3度も同じ問いかけを」という部分は理解を^{いつ}にするものの、そこで何が意味されているのか、何が強調されているのかについては、その読み取り方が以下のように様々です。

1. 同じ問いが繰り返されることで、ペトロは自身のあり様^{よう}をその奥底まで探る者とされた（下記【参考】「2 Beasley-Murray」）。
2. 重要なのは、イエスの答えが3回とも、そのたびごとに「・・・しなさい」というように、事を命じる仕方^{よう}でなされていることである（下記【参考】「3 Wright」）。
3. イエスによる3度の問いかけはペトロに、自分自身が犯した3度の否認の過ちを思い起こさせた。そのようにして、イエスはその罪^{ゆる}を赦し、ペトロをいま一度弟子として再起させようとした。

そこにはペトロの名誉回復の意味が込められており、ペトロはこれにより、罪の告白と深い悔い改めに導かれたのである。(下記【参考】「4 森野」「5 大宮」)

4. ペトロの3度の否認や後悔がこの箇所を中心ではない。また、イエスによる罪の赦しということをごここから読み取ることもできない。ここでの要点は、ペトロに教会の最高指導権が授与されるという点にある。(下記【参考】「6 シュルツ」)

5. ペトロの3度の否認を意識し、ここでペトロを弟子として再起復権させようとしている(下記【参考】「7 松永」)。

というふうなぐあいでは、(時に大きく、時に微妙に異なる)理解の違いに少々途惑いを憶えさせられるほどです。

B. 2つの語の使用に意味を見て取る立場

一方、(数こそ多くはないものの)2つの異なる語が使われているのにはそれなりの意味があると考えられる人もいます。加藤(常昭)先生がその一人で、ペトロの応答の背後に、洗足の際に語られたイエスの言葉(ヨハネ 15:12~15)を想定しておられます。すなわち、イエスはその折、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」と言われましたが、ペトロはイエスに問われたとき、3度とも「あなたを友として愛する」という言葉を用いている。ペトロはそうにして、そこですでに、イエスに対する(命を捨てる)友としての愛を告白しているのです。そして、そのペトロの言葉に思いを合わせるようにして、イエスは最後に「あなたはわたしを友として愛するか」と問われた。そこには実は、罪の自覚とその悔い改めとから来るペトロの深い悲しみが伴っていたのですが、ペトロはこうしてその愛を新しくしていただいたと言われます。(下記【参考】「8 加藤」) これまた、^{ひとあじ}一味違った視点からの読み取りではないでしょうか。

C. その他

これら以外にも、例えば Hull (ハル)などは2つの語の相違に重きを置きつつ(上記Bに同じ)、しかし違いにあまり意味がない可能性もあると言います(上記Aに同じ)。そうにして、おそらくは、イエスがより高い信仰的献身を求めたのに対し、ペトロはそのレベルの備えができていなかった。イエスはそこで、ペトロに合わせるようにして、とにもかくにもより人間的なレベルの愛情を確認しようとされた。そして、そのことがペトロの悲しみを引き起こしたのだらうと、まずは旧来からの代表的解釈を提示します。ただし、その一方で、ここでの基本的問題は愛の種類^{うんぬん}云々ではなく、イエスに対するペトロの個人的愛情を群れへの牧会的関心に転換することにあるのかもしれないと語ってしまいます。ペトロが悲しくなったのも、イエスを3度目に否認したときに^{にわとり}鶏が鳴いたというあの光景を思い起こしたからではなかろうかと記しています。可能性の並列的記述と言えるでしょう。(下記【参考】「9 Hull」)

ちなみに、Barclay (バークレー)は不思議なことに、これらの点には言及していません(下記【参考】「10 Barclay」)。

いかがでしょうか。使われている2種類の動詞(ἀγαπάς, φιλω/φιλείς)の意味合いから始ま

り、イエスによる3度目の問いかけが「3度も/3回目も」なのかそれとも「3回目に」なのか(τὸ τρίτον)、そしてそこでの使信ししんの中心ははたして何なのか・・・と、多くの研究者が様々な論を展開しています。その多彩さは上に見るとおり、必ずしも小さなものではありません。それらの論点については、(例えば、「愛する」と「好き」の異同の再吟味といったものも含め)一つひとつ丁寧ていねいに見ていくことが必要になるでしょう。

しかしながら、そうしたなか、今回ここではある一つのことに注目したいと思うのです。それは、本文の読み取りにおいて上述のように多様な立場があるなか、それでもある一点についてはなおほとんどの人たちが例外なく同じように理解し、同じように受け止めているという事実です。それは何かと言えば、ペトロが深い悲しみに沈んだということです。17節の中ほどにこうあります。「ペトロは、イエスが三度目も、『わたしを愛しているか』と言われたので、悲しくなった」(新共同訳)。ここで「悲しくなった」と訳されている語は原語のギリシア語では(前述のとおり)"ἐλυπήθη"という言葉で、"λυπέω"^{りゅーべオー}の変化形(直説法、受動相、アオリスト、単数、3人称)で用いられていますが、特段の含意を有する語ではありません。受動形で「悲しむ」「苦悩する」を意味します。つまり、ペトロはこのとき、文字どおり悲しみ、苦悩したのです。おそらくは、イエスを3度にわたって否認した、内に疼うずいてやまない自らのあの背信の光景が脳裏よみがえに甦よみがえったのではないのでしょうか。けれども、そうした情景のあれこれや、さらには悲しみを引き起こしたその契機のあれこれが今回の焦点ではありません。今回ここで目を凝らしたいのは、第一にペトロが深く悲しんだというその事実であり、第二にその悲しみの中身です。イエスによる3度の問いと、それらに対するペトロの3度の応答。その推移の全体を文脈の流れに沿って読み進めるとき、ペトロの心持ちの変化がはっきりと見えてきはしないのでしょうか。ペトロの心情はどう見ても、(1度目、2度目と)しだいにきつくなって、そして最後に(3度目に)それが解かれて解放されるというふうには描かれていません。2度の問いかけにきつくなったペトロの心情を察し、3度目はそのきつさを和らげるようにして、イエスはペトロが口にしたのと同じ言葉で語りかけられたと読むことはできません。事はむしろ逆で、(1度目、2度目と)どこかあっさりとして答えていたそのペトロが、最後に(3度目に)愕然がくぜんとしている。それが今回の箇所に見るペトロの姿ではないのでしょうか。だとしたら、その愕然の中身はいったい何なのか。その悲しみの中身ははたして何なのかということです。これが今回の焦点にほかなりません。

実際、この点についても、研究者のほとんどがほぼ共通した理解を示しています。そして、それは実在的を得ていて、今回の出来事に込められたヨハネの使信の深みを突いているように思われます。例えば Beasley-Murray (ビーズリー=マリー) は(同じ問いを繰り返されることで、ペトロは自身のあり様ようをその奥底まで探る者とされた)と述べていると先に記しましたが、そのようにして)ペトロは自らの言葉が実体のあるものか否か、深く思い知らされたとみえています。なぜなら、十字架以前のかつての自信は今や、ペトロからすっかり消え去っていたからです。(下記【参考】「2 Beasley-Murray」)このような受け止め方は、加藤先生の一文にとりわけ美しく表現されています。すなわち、

「ペトロの『わたしはあなたを愛している』という表現は、喜びに溢^{あふ}れて、悲しみも何もかも消えてしまったところでなされている愛の告白ではありません。悲しみが、ますます深くなるところでなされたものです」と、加藤先生は言われるのです。(下記【参考】「8 加藤」)要するに、イエスとペトロのやり取りは、Wright (ライト) がいみじくも言っているように、「そうか、それじゃオールライト、オーケー」というような軽いものではないということです(下記【参考】「3 Wright」)。そこには確かに、ペトロの深い苦悩がありました。

そして、深い悲しみと苦悩のそのところに 同時にまた、イエスの顧みと伴いがあったということ。それがふたりのやり取りから見えてくるもう一段深い真実であり、この箇所における中心的使信の一つと言えるように思います。言葉を換えるなら、悲しみがそのように深く浸透したそのところで、だからこそ真実 身にしみて知らされるイエスの深い優しさです。恵みの大きさ、深さを物語るものと言えるでしょう。つまり、イエスの期待を何度となく裏切り、自分のダメさを繰り返し思い知らされたペトロでした。ですから、ペトロはそんな自分の本質に愕然とさせられ、悲しみのうちに心を悩ませたのでしょう。けれども、ペトロは同時に、(時に 独り熱くなったり舞い上がったりして、軽薄にそうすることもあったとはいえ、しかし) 決してイエスを愛していなかったわけではない。偽りの思いから 事を言ったりしたりしたわけではありませんでした。このように、そこにいたのは 自らの頼りなきにくずおれ、でも自分は自分なりに精いっぱいやったんですと、思うようにならない現実にもんもん悶々とするペトロでした(私たちの日常となんとよく似ていることでしょうか)。「主よ、あなたは何かもご存じです」(17) と イエスに訴えかける言葉のうちに、そんなペトロの姿が見ては取れないでしょうか。イエスは今、このペトロのところに来てくださっているのです。ダメさを味わい尽くしてくずおれている、そのペトロのところに。真実 信頼しうるものは自分の中にはないことを思い知らされた、そのペトロのところに。そこまで(いわば)落ちてしまったそんな自分のところに この方はなおも一緒にいてくださっていると知ったなら、はたしてどうでしょうか。ペトロはこの深みから、イエスへの信頼をいま一度 新たにされたのではないのでしょうか。(至らなさも含め)すべてを御存じでいて、しかも 自分の思いを深いところで受け止めてくださっている。このお方のその愛の真実をおいて、信頼に足るものが他のどこにあろうか。ペトロはきっと、そのように感じ取ったのだらうと思います。事実、この箇所の読み手のほとんどが同様の理解を記しています(下記【参考】「2 Beasley-Murray」「3 Wright」「4 森野」「5 大宮」「8 加藤」「9 Hull」。「6 シュルツ」は一部)。悲しみの深いそのところから、優しさの深みを知る者とされる。そこにあるのはまさに 優しさの奥行きであり、恵みのそれではないでしょうか。

このことは、(前回 前もって申し上げたとおり) 事柄の推移を逆引き的に見ていくと、いつそう明瞭に見て取れるように思われます。今回のやり取りに続けて、ヨハネは 2 つのことを連続して記しています。第一に、イエスがペトロの 殉教^{じゆんきょう}を予告し、そのうえで「わたしに従いなさい」(21:18~19) と告げられたこと。次に、(前回 取り上げた)「あなたに何の関係があるか」(21:22) との、ペトロに対するイエスの言葉です。そして、ここでもまた、「あなたは、わたしに従いなさい」(同) と、同じ指示が繰り返されています。つまり、人との比較や競争といった

自意識の囚われから解き放たれ、イエスを真つすぐに見詰めて、その御旨に従うこと。そのことが最終的に説かれ、それに先立って、殉教をも覚悟のうえで 群れの牧会に献身するようと、具体的な指示が告げられているということです。これらはどちらも厳しいもので、うわついた軽々な気持ちからできることではないの言うまでもありません。だとしたら、そこへと向かう前段であるその直前の今回のやり取りが底の浅い癒やしを与えるような、そのような浅薄で安易なものとはどうい考えられません。自身のどうしようもなさ底深くくずおれつつも、そこになおも伴ってくださっているイエスを発見する。ちぐはぐで矛盾だらけの自分ながら、それでも確かに御自身への思いのあることを認めてくださっているイエスを知る。そして、そのイエスから なんと、御自身の教会の働きを担うようにと押し出される。これこそ本当の癒やしであり、回復であり、真実の優しさ、恵みと言えるのではないのでしょうか。

実のところ、今回の箇所はペトロの生涯において、(考えようによっては最大の) 重要な転換点になったところと言えるかもしれません。それまでの自信や優越感、リーダー意識・・・といったあれこれが見事に崩れ去り、悲しみに深く打ち沈んだからです。そして、そこから、恵みによって引き起こされたからです。ペトロはこの深さの優しさによって初めて、それまでと違う人となりに変えられ、それまでと異質の強さを与えられたのではないのでしょうか。ペトロはそのようにして、真実、その後の教会のリーダーとされていったように思われます。ペトロは依然として、ドジもした。しかし、イエスを愛し、いよいよ力強い牧者となっていた。これ以上のことを、誰が求められようか。しかも、イエスが求めるのは決して これ以下でもないのである。Wright はそう語っています。(下記【参考】「3 Wright」)

12 弟子のリーダー格、ペトロの身に起こった出来事でした。が、それは同時に、キリストを信じ、その教会に生きる者にとって、ひとりペトロのような者だけの問題でもないように思われます。キリストに従って生きようとする者なら、誰もがどこかで思い当たるなにかしかなことを、イエスとペトロの間答はその内に抱いているからです。

【参考】

御参考までに、幾つかの注解書や説教集の関連箇所を以下に書き出しておきます。

1

Raymond E. Brown, *The Gospel according to John (xiii-xxi)*, The Anchor Bible 29A, Doubleday & Company, Inc., 1981, pp. 1101-1106.

Notes

xxi 15.

do you love me? ... I love you. An extraordinary variation in the Greek vocabulary appears in the three repetitive verses, 15, 16, and 17. Respectively, there are two different verbs for "to love," for "to know," and for "to feed or tend," and two or three different nouns for sheep. With the partial exception of Origen, the great Greek commentators of old, like Chrysostom and Cyril of Alexandria, and the scholars of the Reformation period, like Erasmus and Grotius, saw no real difference of meaning in this variation of vocabulary; but British scholars of the last century, like Trench, Westcott, and Plummer, found therein subtle shades of meaning. but we note that most modern scholars have reverted to the older idea that the variations are a meaningless stylistic peculiarity.

....

.... the present writer is forced to align himself with scholars ancient (the OL translators, Augustine) and modern (Lagrange, Bernard, Moffatt, Strachan, Bonsirven, Bultmann, Barrett, etc.) who find no clear distinction of meaning in the alternation of *agapan* and *philein* in vss. 15-17. The reasons for this are: (a) There seems to be a general interchangeability of the two verbs in John. (b) In Hebrew and Aramaic there is one basic verb for expressing the various types of love, so that all the subtlety of distinction that commentators find in the use of the two verbs in 15-17 scarcely echoes the putative Semitic original. We note that LXX uses both verbs to translate Heb. *'ahab* In the Syriac translations of 15-17 only one verb is used. (c) Peter answers "Yes" to the questions phrased with the verb *agapan* even though he expresses his love in terms of *philein* and thus shows no awareness that he is answering a request for a higher or more spiritual or more rational type of love (*agapan*) with an offer of a lower or more affectionate form of love (*philein*).

....

17.

For the third time Jesus asked. While there was no article used with *deuteron*, "a second time," the definite article appears before *triton*, "the third time," indicating emphasis. Spicq wants to translate it "this third time," and to find the offense of the third request in the fact that this time Jesus has asked in terms of *philein*, even though Peter has already twice stated his love in terms of *philein*. The idea that the sadness is related to the change of verb goes as far back as Origen. However, Graechter insists more plausibly that the real stress is not on the use of *philein* but on the *to triton*: "Still a third time Jesus asked"—a translation that

implies the synonymous character of the questions.

2

George R. Beasley-Murray, *John*, Word Biblical Commentary 36, Word Books, 1987, pp. 392-409.

Notes

The difference between the terms for love in the conversation between Jesus and Peter led Westcott to assume that the changes were deliberate: whereas Jesus uses the higher term for love (*ἀγαπάω*) Peter lays claim only to the feeling of natural love (*φιλέω*). But when Jesus puts the question the third time, he adopts Peter's word, as though he would test the truth of even the lower love that Peter professed, and it was for this reason that Peter was grieved, namely that Jesus appeared to doubt the reality of even that love which he had professed. Bernard examined the use of the two verbs in the Fourth Gospel and concluded that whatever distinction they may have had elsewhere, in the Gospel they are synonymous. Both terms are used of God's love for man (3:16; 16:27), of the Father's love for the Son (3:35; 5:20), of Jesus' love for men (11:5; 11:3), of the love of men for men (13:34; 15:19), and of the love of men for Jesus (8:42; 16:27). Since the LXX Syr., and OL translations use both verbs indifferently, Bernard drew the inference that "we must treat *ἀγαπᾶς* and *φιλεῖς* in vv 15-17 as synonymous, as all patristic expositors do." With this almost all exegetes concur, with two recent exceptions. J. Marsh asserted that whereas Bernard proved the point of rough synonymy, that does not prove that the words are used synonymously in this passage. Spicq also insisted that the distinction should be maintained here: "The subject is not a private conversation or a moral lesson given to a disciple, but the establishment of Peter at the head of the Church, his primacy; and the Saviour claims from him not an affection of a friend but the religious love of *ἀγάπη*, which constitutes the life itself of his Church." Loftly as this sounds, it does not take seriously the habit of the author of this chapter to use synonyms. We have already noticed his treatment of *προσφάγιον*, *ὄψάριον*, and *ἰχθύς* as equivalents, despite their original differences in the meaning. So also in vv 15-17, apart from the use of the two verbs for love, we find two verbs used for the shepherd's care for his sheep, *βόσκω* and *ποιμαίνω*, and two or even three nouns for the sheep, *ἀρνία*, *πρόβατα*, and *προβάτια* (the MS support for the last is good, but not unanimous). It is difficult to believe that the author intended

any distinction of meaning in these varied verbs and nouns; the same applies to the two verbs fo love.

16-17 The unexpected repetitions of the Lord's question to Peter have the effect of searching him to the depths of his being. We have seen (in the *Notes*) the improbability of the variety of terms having any major significance, alike in the repeated question of Jesus, the answer of Peter, and the Lord's commission to him. The pain or grief of Peter was not due to Jesus' framing his question with the use of Peter's own word (*φιλεῖς* instead of *ἀγαπᾷς*), but is explained by Jesus' act when for the *third* time he put the same question to him, as though to ask whether there was any substance in his avowal of love, any ground for his accepting its reality. By this time all the old self-confidence and assertiveness manifest in Peter before the crucifixion of Jesus had drained away. He could only appeal to the Lord's totality of knowledge, which included his knowledge of Peter's heart; he more than all people could tell that he was speaking the truth. He really did love him, and more than that he could not say. More than that was not necessary; the Lord accepted his protestation of love.

3

Nicholas Thomas Wright, *John for Everyone, Part 2 (Chapters 11-21)*, Westminster John Knox Press, 2004, pp. 162-166.

So Jesus goes to where the pain is, as he often does (is this why so many resist his gentle advance, like someone putting off seeing the dentist until they can bear the toothache no longer?). And he asks the question that goes to the heart of it all: 'Do you love me?'

Actually, the words he uses vary slightly. When Peter replies, the word he uses for 'love' is different to the one Jesus uses in the first two questions. Then, in the third question, Jesus uses the word Peter himself had been using. But this is probably not important. John does say, after all, that the same question was being asked three times over (verse 17). What matters is that the answer earns, each time, not a pat on the back, not a 'There, that's all right then', but a command.

....

.... Somewhere, deep down inside, there is a love for Jesus, and though (goodness knows) you've let him down enough times, he wants to find that love, to give you a chance to express it, to heal the hurts and failures of the past, and give

you new work to do.

These are not things for you to do to 'earn' the forgiveness. It is grace from start to finish. They are things that will be costly, because Jesus' own work was utterly costly. 'Someone else will dress you and take you where you would rather not go.' Peter will complete this task as a shepherd by laying down his own life, in turn, for the sheep.

....

Peter went from strength to strength. He was still muddled from time to time, as Acts indicates. But he became a shepherd. He loved Jesus and looked after his sheep. No one could ask for more. Jesus never asks for less.

4

森野善右衛門『世の光キリスト』(現代聖書講解説教 8) 新教出版社、1983年、270～280頁。

「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」〔口語訳〕。この同じ問いを三度も、イエスはペテロに向かってくり返されます。この三度は、ペテロが十字架への道を進むイエスを前にして、三度も「この人を知らない」と言ってイエスを否認したことに対応し、そのことをもう一度思い起こさせる意味があるように思われます。ここで復活のイエスは・・・三度もくり返してなされたペテロの否認のあやまち、つまずきの罪をゆるし、清めて、もう一度主の弟子として立ち上がらせようとされる、いわばペテロの名誉回復の意味がこめられているのではないでしょうか。

...

・・・もはや主の前に立つにはふさわしくない者となってしまったペテロ、そのペテロに対してイエスは、あわれみのまなざしとゆるしの言葉を向けられている。したがって、これはペテロに対するイエスの愛とゆるしの語りかけです。主の前に顔を上げることもできないペテロを、イエスはゆるし、かえりみ、もう一度立たしめようとされるのです。ペテロはイエスを見捨てたけれども、イエスは不信のこの弟子を見捨てることなく、かえりみて下さる。しかも、「わたしはあなたをゆるしている」という表現をとらないで、「あなたはわたしを愛するか」と語りかけることによって、「わたしは今もあなたをゆるし、愛しているのだ」ということを、ペテロに対して間接的に語っておられるのです。したがってこの時は、ペテロに与えられた応答と立ち直りのチャンスなのです。ペテロの挫折と失敗とが、致命的なものとならないように、もう一度新しく生きることができるよう、やりなおすことができる機会が与えられている。これはペテロにとっては、すばらしい恵みの時であります。

・・・そこからペテロの悔改め(回心)が起こり、それはペテロの新しい人間としての第一歩のふみ出しとなる。・・・そこでペテロは真に自分の罪を告白し、深い悔改めに導かれたのであり、そこにペテロの信仰のよみがえりがあると言えるのです。

・・・

ここで「わたしを愛するか」と三回くり返し問われていますが、はじめの二回は「アガパース」(アガペー、神的な愛をさす)で、最後の三回目には「フィレイス」(フィリア、友愛、人間的に好きなこと)という別の言葉が用いられているのに注目して見ましょう。邦訳では三回とも「愛する」と同じ訳語が用いられているので、その違いがわかりませんが、もし原語の意味をくみとって訳するなら、三度目には、「あなたはわたしが好きか」と言い表すのがより適切でピッタリするでしょう。
〔しかし〕アガペーとエロースとが違うように、「愛する」と「好き」とは違うのだ、というような議論をすることは、ここではあまり意味がないのです。「イエスを愛する」ことは、「イエスが好きだ」ということとまったく別のことではない。そう思うのは、あまりに形式的・図式的な考え方にとらわれている人です。だからここでイエスは三度目に、表現と語調を変えて、「あなたはわたしが好きなのか」と念を押すようにペテロの心にくいこむ問いをなされたのではないのでしょうか。

・・・

「わたしを愛するか」という三回の問いに、「はい」と答えたペテロに対して、イエスはさらに、「わたしの羊を養いなさい」とさらに三度くり返して語られます(一五、一六、一七節)。これはいわゆるペテロに与えられたイエスの「牧会命令」です。この使命・委託を果たすために、ペテロはもう一度立たしめられ、主の証人として用いられ、遂にはそのために殉教の死を遂げるであろうことが示唆されています。・・・(一九節)・・・(一八節)。

5

大宮溥『愛と自由の福音 ヨハネ福音書講解説教』教文館、2012年、224～226頁。

さて朝の食事が終わったとき、主イエスはペトロに向かって、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」(二一・一五)と尋ねられました。そしてペトロが「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と答えると、主は彼に「わたしの小羊を飼いなさい」と命じられました。しかもこの問答を主イエスは一度で終らせず、三度繰り返します。ペトロはこのように執拗に繰り返される主イエスの間に悲しみを覚えました(二一・一七)。

キリストから同じ質問を三度受けたとき、ペトロはつい先日、主イエスが捕らえられて裁判にかけられたとき、事の成り行きを見届けようと大祭司官邸の中庭にまで入り込んでゆきましたが、人々に見とがめられて「あなたはイエスの弟子ではないか」と質問されたとき、身の危険を覚えて、三度繰り返して「知らない」と主を否認し、主を裏切った、あの出来事を思い起こさざるを得ませんでした。・・・

しかし主イエスは、よみがえられると真っ先にペトロに現れ、彼に声をかけられます。これは、たとえペトロがイエスを裏切っても、主イエスはそれを赦し、ペトロを愛し続けていることを、身をもって示されたのであります。この主イエスの赦しと愛を受けて、ペトロは改めて、深い懺悔と共に、前にもまして熱い愛をもって、主に従う決心をしたのであります。

これに対して主イエスは、「わたしの羊を飼いなさい」(二一・一七)と命じられます。教会の使命は伝道と牧会であります。主イエスはペトロを「人をとる漁師」として伝道に遣わされると共に、「羊の群れを養う羊飼」¹⁵として牧会の任務につかせたのであります。・・・

一八節以下では、ペトロの生涯を預言するような主の言葉が語られています。・・・ペトロが最後に、十字架につけられ殉教の死を遂げることが予告されています。主イエスは「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マター六・二四)と命じられました。ペトロは・・・復活の主イエスに再会して、自分の救いのために尊い命を捨ててくださるほどの愛に触れたとき、自分もキリストのために、またキリストの体である教会のために、自分の十字架を背負って主に従うことを決意したのであります。

6

ジークフリート・シュルツ (松田伊作訳)『ヨハネによる福音書』(NTD 新約聖書註解 4) NTD 新約聖書註解刊行会、1986年、483~484頁。

¹⁵ 食事のあとイエスがペテロに、自分を他の弟子たちが愛している以上に愛しているか、と尋ねる。ペテロはこの問いに対し無造作に然りと答えることはできない— どうして自分の仲間のことを判断できよう! —、けれども自分がイエスを愛していること、そしてそのことをイエスが神的全知の力によってずっと前から知っていることをイエスに確言する。・・・

¹⁶⁻¹⁷ もう二度、イエスは同じ質問をペテロにする。・・・イエスが三度も同じ質問をするのでペテロは悲しくなり、もう一度はっきりとイエスの全知に訴える。この箇所の註解者たちの多くは、イエスが三度も同じ質問をするのはペテロの三度の否認を直接示唆するものと、解して来た。しかしこの解釈は、あるいは少しは当たっているかも知れないとしても、この話の中心ではない。イエスが否認のことを直接指しているのでもないし、また〔ペテロの〕後悔とか、ましていわんやイエスによる免罪というようなことを、この行間から読み取ることはできないのである。むしろこの対話の要点は— そしてこれは話の続きからも分かるのだが—、ペテロに教会の最高指導権が授与されるという点にあるのである。・・・復活の主の言葉の中での「小羊」と「羊」の交替には、特別の意味はない。

¹⁸ . . .

¹⁹ このたとえの言葉が、ペテロの殉教死を指すものと解釈される。— ペテロが殉教に導かれる時も、それと全く同じようになるのだ、と。とは言っても、両手をのばす姿勢をペテロの十字架とむぞうさに結びつけるのは恐らく適当でないであろう。むしろそれはただ・・・ペテロは今、自分の非業の死によってもなお主を讃美することになるのを知ったのである。この「神の栄光をあらわす」という言葉は、既にヨハネ福音書以来の言語伝統である。そうしてさらにイエスがペテロに呼び掛けて、自分に従えと言う、つまり殉教の死に至る道である。

7

松永希久夫「ヨハネによる福音書」『新共同訳 新約聖書略解』(山内眞監修) 日本基督教団出版局、2008年、311頁。

一五一一七 復活のイエスとペトロとの対話。ペトロが三度までイエスを否認したことを意識して、ここでペトロを弟子として再起復権させようとしている。三度の対話の言葉遣いは細部において異同があるが、あまり意味を持たせることはできない。もつとも苦慮するのは、「愛する」を意味するアガパーンとフィレインと、異なった二つの動詞が用いられている事実である。福音書記者は同義異語を巧みに用いるが、意味上の差異は持たせていない。そうすると、ここも単純に《愛しているか》《愛しております》という以上のことを読み出すことはできない。しかし、この箇所では、編集者は言葉の「遊び」というか 双方の語意を区別して技巧を凝らしているようにも思われる。・・・

一八一一九 ペトロの殉教を指している。《わたしに従いなさい》という命令は、イエスがまず先立って進み行かれたことを想起させる。勧められているのは、父の意思に子の意志を一致させた模範に従うことである (一三・一四一一七)。

8

加藤常昭『ヨハネによる福音書 5』加藤常昭説教全集 16、教文館、2005年、266～277頁。

・・・ここでは、ペトロにとって、どうしても自分で越えなければならないものがあつた。ほんとうは、自分で越えるべきであつたが、ここで主に愛を問われ、それに答えて愛を言い表しているところで越えさせていただいたものがあつた。それは・・・ペトロがこれまでに三度、イエスを知らないと言つた言葉を口にしてのことです。それは何よりも愛の拒否です。主イエスの窮みに至る自分への愛を拒否したことです。・・・その動機は何と言っても死です。死への恐れです。死が主イエスと自分との間に立ちはだかり、愛の絆を断たせた。・・・そのペトロと向かい合い、このペトロの殉教を視野に入れつつ・・・三度、改めて愛を求められる。ペトロの愛を新しくされる。この問いに答えるとき、ペトロは、そこで初めて真実の悔い改めに至る。そして、愛を新しくしていただく。しかも、このとき、また死に勝つのであります。

・・・ペトロの「わたしはあなたを愛している」という表現は、喜びに溢れて、悲しみも何もかも消えてしまったところでなされている愛の告白ではありません。悲しみが、ますます深くなる場所でなされたものです。そこでペトロは何と言つたか。「主よ、あなたは何もかもご存じです」。この言葉は、一度目にも二度目にも繰り返された言葉が、少し深まって言い換えられているだけです。・・・わたしが、いったいどんな人間であつたかということ、わたし自身が、どんなことをあなたに対してしたかということ、わたしよりもあなたの方がよく知っていてくださる。そして今、わたしがあなたを愛してやまないことを、あなたが知っておられる。だからこそ、この愛の確かさはわたしのうちに根ざすものではない。・・・わたしを知り抜いてくださる愛の中にあるのであつて、わたしの愛の決意の中にあるのではない。わたしのまごころにあるのでもない。この主イエスに対する信頼は、この深い悲しみを伴い続けている。罪の自覚を伴い続けている。その罪を悔い改

める悲しみが伴い続けているということは明らかであります。しかも、そこに、どんなに深い喜びがあることであろうか。

・・・

・・・誰を愛しているにしても、自分は確信をもってあなたを愛しているなどとは言えない自分であるということを知る。どの人に対しても、いや、誰よりも神に対して申しわけないと思いつけている。しかも、その自分自身の愛の貧しさを誰よりも深く悲しみながら、この自分が愛されている、この自分が滅びないことを、主イエス・キリストの父である神が願ってくださるということを知る。われわれもまた愛をもってそれに応えざるを得ない。そのとき、愛は具体的なわざを生みます。ただ神を当てにしているなどというようなとぼけた信頼は、信仰の名によって正当化されない。愛は神のために身を^{ささ}げることがを意味する。キリストのために死ぬことを意味する。そのように激しく、しかし揺るぐことのない愛のわざになる。しかも、その確かさは、常に、主イエス・キリストの側にあるのです。何という自由、何という確かさでしょうか。

ここで、しばしば問題になることがある。「わたしを愛しているか」と主イエスが三度お問いになりましたとき、はじめの二度は、神の愛を表すとよく説明される独特の愛を表すアガペーというギリシア語がありますが、その動詞形を用いている。そして三度目の「わたしを愛しているか」と一七節に記される問い、そこでは、友としての愛を表す別の言葉、フィーリアの動詞形に変わります。この言葉の変化に、何の意味もないと考える人もあります。しかし、私はそうは思いません。・・・あの弟子たちの足をお洗いになった後で、主イエスはこのように言われました。第一五章一二節であります。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの^{おきて}掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。・・・わたしはあなたがたを友と呼ぶ」。興味のありますことに、ペトロは三度問われたとき、三度とも、あなたを友として愛する、という言葉を用いている。既にそこで、わたしはあなたを友と断言している。あなたのために、いのちを捨てる友としての愛を与えられた。その愛を今告白する。それをあなたも知っておられる。そう言っている。そして、そのペトロの友としての愛の言葉に、主イエスの方でも心と身を合わせるようにして、あなたは、わたしを友として愛するか、と三度目の最後の問い、愛を完成する言葉となる問いを口にされました。そして、あなたは友としてのわたしのためにいのちを捨て、そこにあなたの喜びが溢れる、ということ、もう一度思い起こさせてくださるのです。

9

William E. Hull, "John," *The Broadman Bible Commentary 9, Luke-John*, Broadman Press, 1970, pp. 373-374.

.... The threefold repetition of the question, *do you love me?* (vv. 15, 16, 17), corresponds to the threefold denial which prompted it. Peter was asked to reaffirm

his loyalty to Jesus as emphatically as he had earlier rejected it. Because of a variation in the Greek verbs used for *love* in Jesus' questions and in Peter's answers, there is the strong possibility that in vv. 15 and 16 Jesus was asking for a higher spiritual devotion (*agapao*) than Peter was ready to give (*phileo*), thus he grieved Peter in v. 17 by asking if he loved him even on a human level (*phileo*). In the fourth Gospel, however, these two Greek verbs for *love* sometimes appear to be synonymous; thus it may be that the basic issue is not the kind of love involved but the willingness of Peter to translate personal affection for Jesus into a ministry of concern for the flock. Probably, Peter was grieved when Jesus said to him the third time, *Do you love me?* because it reminded him of his third and final failure in the time of testing as signaled by the cockcrow (18:27).

....

.... he was also confident that his Lord, who knew *everything*, would know that he loved him. Peter finally realized that the crux of a commitment to Christ lay not in what he said was true, for that could quickly prove to be false (e.g., 13:37), but in what Jesus knew was true in the depths of Peter's being (cf. 2:25, 10:27).

10

William Barclay, *The Gospel of John, Volume Two*, The New Daily Study Bible, Westminster John Knox Press, 2001, pp. 332-334.

(言及なし)